温泉地からの声 4

当財団運営の「温泉まちづくり研究会」会員で、温泉地でご活躍のキーパーソンから、「守り伝えていくもの」「変えていく必要のあるもの」についてご寄稿いただきました。

阿寒湖温泉

NPO法人阿寒観光協会まちづくり推進機構 事務局長 大川 富雄

写真1 白湯山から雄阿寒岳、阿寒湖を望む （写真提供：筆者）

阿寒湖温泉の魅力を考える

阿寒湖温泉は、年間五十七万人が宿泊し、日帰り客を加えると約百万人の観光客が訪れる、北海道を代表する温泉地だ。しかし、周遊型観光の団体旅行客の多くは、夕方から夜にかけて到着し、翌朝早々には次の目的地に向けて去っていく。

これは、アジアからの団体旅行客にも共通する特徴だ。そのため、日中の温泉街は、夏休みシーズンを除くと人通りが少ない。湖岸に沿って広がる1キロメートルほどの温泉街には、シャッターを下ろしたままの店舗も目につく。観光地として、日中の賑わいを高めるためには、滞留時間や滞在日数を伸ばすことが大切だ。

阿寒湖は日本で二番目に国立公園に指定され、二〇〇五年にはラムサール条約の登録湿地にもなった、自然の豊かなところだ。阿寒湖温泉は、湖と森と火山が織り成す日本を代表する山岳自然景観を持つ地域と言われている。この他にも、世界的にも貴重な「マリモ」や地域性豊かな「アイヌコタン」など、数多くの観光資源を有している。

マリモの展示施設があるチュウルイ島に立ち寄る遊覧船の年間利用客は九万人。アイヌコタンにありアイヌ文化を見せる劇場イコロの年間入場者数は五・五万人だ。それぞれの利用客が別々であったとしても、十五万人弱しか阿寒湖温泉の代表的な観光施設を利用していないことになる。また、滞在時間の短い周遊型観光が主流の現状では、その豊かな自然に親しみ、楽しんでいるお客様も残念ながら少ない。

それでは、何が阿寒湖温泉の観光資源なのだろうか。

その一つには、滞在中、多くの時間を過ごす宿泊施設が挙げられる。観光地の魅力は温泉と食事というお客様も多いので、阿寒湖温泉でも旅館・ホテルでの滞在自体が、温泉地としての満足度や評価に直結していると考えられる。当地では、宿泊施設が重要な観光資源になっているといっても過言ではない。

触れてほしい阿寒の森、その魅力

それでは、阿寒湖温泉の自然は、お客様にはどのように映っているのだろうか。ガイドツアー限定だが、一昨年から、これまでは立ち入れなかった森での散策が可能となり、ようやく阿寒の森の素晴らしさがお客様に認識されつつある。

自然との接し方は、時代とともに変化している。ただ自然を見るだけでよかった時代から、現在は、川に入って釣りをしたり、森の中を自転車で走ったり、湖でカヌーを漕いだり、アクティブに自然と関わることが普通になってきている。自然の中で楽しむアクティビティが増えることはお客様の滞留時間を伸ばすことにもつながる。

しかし、阿寒湖温泉周辺の深い森には、まだ人が自由に入ることはできない。湖岸の遊歩道も少ない。湖を見ることができるのは、温泉街のわずかなエリアだけだ。お客様を受け入れるエリアでは森歩きや湖岸・川沿いの散策ができる、快適な遊歩道や清潔感のあるトイレなどがほしい。阿寒湖温泉の自然を快適に楽しめる環境整備が望まれる。

自然を楽しむ方々を増やしながらよりよい環境を維持するためには、同じ設備でも「最低限あればいい」のレベルではなく、快適性にも配

写真2 魅力的な温泉街をそぞろ歩きして楽しむ （写真提供：筆者）

慮した質の高い施設が望まれる。

一方で、人を立ち入らせないエリアでは、厳格に自然を守ることも必要だ。国立公園の阿寒湖において、どのような組み立て方をすれば、自然を守りながら、身近に体感できるか。これは阿寒湖温泉の今後を考える上でとても大切なポイントとなる。自然を満喫できる環境とアクティビティの双方が整えば、日中、温泉街に滞留したり、連泊するお客様には、夕食の選択肢がほしいところである。地域内に魅力的な飲食店があれば大きな楽しみになる。そんな飲食店の充実が不可欠だ。宿泊客にとっても日帰り客にとっても楽しく、魅力的な温泉街を創り出し、温泉街に賑わいを取り戻したい。

この十数年、阿寒湖温泉では、特に旅館・ホテルと商店、飲食店など地域が一体となってまちづくりを進めてきた。観光は常に地域と共にあることを肝に銘じ、今後も阿寒湖温泉の観光の発展に寄与していきたい。

大川富雄（おおかわ とみお）
神奈川県逗子市生まれ。二〇〇一～二〇〇九年、倶知安町においてシーニックバイウェイの活動団体のNPO法人設立から事務局を担当し、各種イベントを企画、運営。二〇一〇～二〇一一年、ニセコひらふ地区BID導入に関する業務を支援。二〇一一年、札幌商工会議所において、外国人おもてなしに関する調査業務プロジェクトリーダーを務める。二〇一二年より現職。

北海道釧路市「阿寒湖温泉」

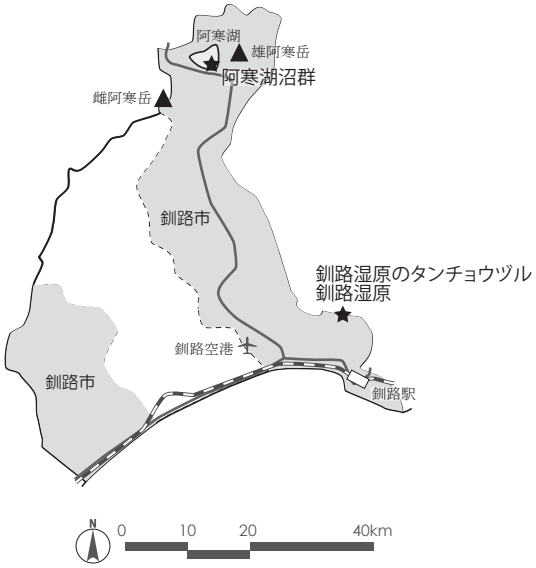
阿寒湖温泉は、阿寒湖や特別天然記念物の「まりも」に代表される阿寒国立公園の豊かな自然やアイヌ文化、そして豊富な天然温泉を有し、『ミシュラン・グリーンガイド・ジャポン』で三つ星の評価を得るなど、北海道を代表する観光・宿泊拠点である。

2000年に住民参加を特徴とするまちづくりを開始。現在も『阿寒湖温泉・創生計画（ビジョン）2020』に基づき、長期滞在できる温泉地を目指して、ホテル・旅館、土産品店、飲食店、住民など、地域が一体となった取り組みを展開中である。

観光客も参加し、自然に感謝の祈りを捧げる「千本タイマツ」

北海道釧路市「阿寒湖温泉」の概要

面積	73,925ha（阿寒地区、2014年）	産業別就業人口	（阿寒地区、2010年） 第1次：360人、第2次：319人、第3次：2,129人
人口	5,540人（阿寒地区、2010年）		
交通	＜釧路、女満別、帯広空港から車利用＞ ・釧路空港～阿寒湖温泉 約1時間 ・女満別空港～阿寒湖温泉 約1時間10分 ・帯広空港～阿寒湖温泉 約2時間30分 ＜新千歳空港から車利用＞ ・新千歳空港～（道東道利用）～阿寒湖温泉 約4時間30分		
主な観光資源	＜A級＞ 阿寒湖沼群、釧路湿原、釧路湿原のタンチョウヅル ＜その他の資源＞ 雄阿寒岳、雌阿寒岳、阿寒湖のマリモ、アイヌコタン、アイヌシアターイコロ、阿寒湖畔スキー場など		
観光客数	964,000人（阿寒湖温泉、2012年度）		
宿泊者数	531,000人（阿寒湖温泉、2012年度）		
宿泊施設	17軒（阿寒湖温泉、2014年度、協会HP掲載）		
宿泊収容力	5,593人（阿寒湖温泉、2014年度、JTBF推計）		



資料：平成22年国勢調査（総務省）
（公財）日本交通公社資源台帳
釧路市阿寒湖温泉支所
NPO法人阿寒観光協会まちづくり推進機構HP⇨http://www.lake-akan.com/

（公財）日本交通公社作成

草津温泉

一般社団法人草津温泉観光協会 理事
草津温泉旅館協同組合 理事
株式会社日新館 専務取締役
湯本 晃久

草津にしかないモノ、コトを大切に

草津温泉では、辺りに硫黄の香り（嗅覚）が漂い、シンボル「湯畑」では、目の前で湧き立った豊富な温泉が湯気を上げながら木樋を通り滝になって流れ落ちる様子（視覚）を、轟音（聴覚）とともに、自然と楽しむことができる。また、足湯や手湯では、その熱さ、柔らかさ（触覚）を感じるなど、まさに〝四感〟で温泉を体感することができる。

そして、湯畑の周りには、「湯もみ」と呼ばれる伝統的な風習を見て体験できる「熱の湯」や、旅行者にも人気の外湯（共同浴場）の「御座之湯」「白旗の湯」があり、また、高台には千年以上にわたり草津温泉を見守ってきた名刹「光泉寺」が位置している。今年七月には「湯路広場」も新たに整備され、湯畑周辺は、浴衣姿で思い思いに散策されるお客様で賑わいを見せている。

大学入学のために上京するまで、草津温泉、特に旅館に生まれた私にとって、温泉はもはや空気や水と同じ存在で、「温泉とはどこでもこういうものだ」と思い込み、その価値を特段意識することはなかったように思う。二十五歳のときに帰郷し、その後の旅館組合青年部などの活動を通して、全国各地の温泉地の方々と交流する機会に恵まれたが、ある有名温泉地のリーダーが発せられた一言に、はっと目が覚めた。曰く、

「ああ、この湯畑、このまま地元に持って帰りたい」。

我々が当たり前のように目にしてきた「浴衣でのそぞろ歩き」が体感できる温泉地は全国的に見てもそれほど多くなく、なおかつ草津ほど前述の〝四感〟をもって温泉情緒を楽しめる温泉地は希有なのだと、この一言で気づかされた。

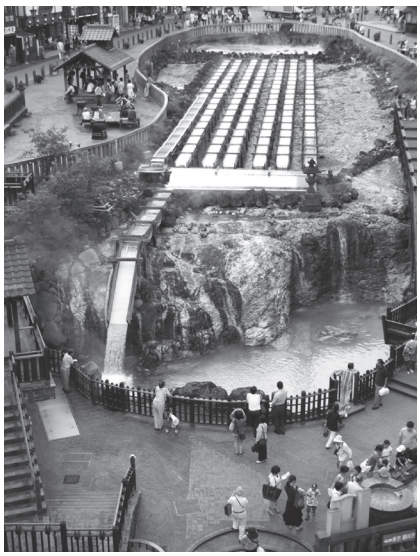


写真1　世界に誇る自然湧出泉源「湯畑」
（写真提供：（一社）草津温泉観光協会）

写真2　源頼朝ゆかりの共同湯を再建した「御座之湯」
（写真提供：草津町企画創造課）

温泉そのものと文化を守る

そうであるならば、草津温泉にいる我々がすべきこと、それは「（日本の）温泉、温泉文化を象徴する存在であり続け、そこで培われた情緒、文化を守り続ける」こと。

そのためには、まずは〝温泉そのもの〟の保全が必要不可欠。草津白根山は温泉をもたらしてくれる恵みの山。その草津白根山に畏敬や感謝の念を抱きながら、温泉水の源となる山麓の森や地中を這う湯脈を守り、温泉の生成を阻害する恐れのある開発を阻止するなど、すべきことはたくさんある。

情緒の維持では、特に景観面において、近年、湯畑周辺の駐車場が「御座之湯」と「湯路広場」に生まれ変わったことで、草津により〝絵になる〟風景が誕生した。それらを核として周囲の通りでも、各地区の特性、実情に合わせた「景観まちづくり協定」が結ばれ、住民主体の景観まちづくりの取り組みが進展しつつある。将来的には、若干の〝緩さ〟も許容した、温泉地特有の包容力を持った風景ができるのではないかと期待している。

そして、忘れてならないのが「温泉文化」の継承。「湯もみ」は伝統的な入浴法の枠を超えて、「チョイナチョイナ」という合いの手も楽しく、湯もみ唄と共に全国に知れ渡っ

ている。町民が長らく伝承してきた白根神社のお祭り、温泉女神が降臨する幻想的な温泉感謝祭なども草津の温泉文化を語る上でなくてはならない存在であり、後世にしっかりと守り伝えていきたい。

しかし一方で、草津の先人たちは守るべきものは守りつつ、より魅力的な温泉地づくりに向けた変化（進化）を恐れることなく、実行に移してきた。現に湯畑は四十年ほど前に岡本太郎氏の監修で、現在の丸みを帯びた形状に変わり、町民にも旅行者にも愛される草津のシンボルとなった。

我々も、「温泉、温泉情緒、文化を守り続けること」に加えて、湯畑ばかりではなく周辺部を含めた温泉街全体を魅力的なまちにすること、そしてアピールしていくことに積極的にチャレンジしていきたい。

湯本晃久（ゆもと てるひさ）
群馬県草津町草津温泉生まれ。立教大学社会学部観光学科を卒業後、（株）ミキ・ツーリスト勤務を経て、一九九七年より、草津温泉・日新館に専務取締役として勤務。家業である旅館を守りながら、草津温泉のまちづくりに取り組む。現在、（一社）草津温泉観光協会理事、草津温泉旅館協同組合理事、草津町議会議員（一期目）、草津町景観まちづくり協議会委員などを務める。

群馬県草津町「草津温泉」

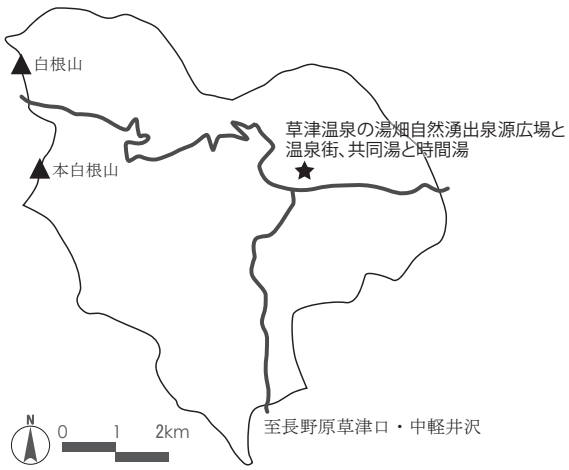
草津温泉は、草津白根山、本白根山など、上信越高原国立公園の豊かな自然と自噴湧出量日本一の温泉に恵まれ、日本三名泉の一つにも数えられる温泉地である。古くは湯治場として栄え、近年は「温泉と高原、文化とスポーツの国際温泉リゾート地」として知られている。

2001年には「泉質主義」を宣言し、草津ブランドの確立に努めてきた他、「歩きたくなる観光地づくり」に積極的に取り組んできた。最近では、景観に配慮した魅力あるまちづくりを行政、民間企業、住民が一体となって進めている。

草津節も楽しい、熱の湯での「湯もみ体験」

群馬県草津町「草津温泉」の概要

面積	4,974ha（町全体、2014年）	産業別就業人口	（町全体、2010年） 第1次：39人、第2次：349人、第3次：3,742人
人口	7,160人（町全体、2010年）		
交通	＜東京から鉄道・バス利用＞ ・上野～［JR特急「草津」］～長野原草津口（約2時間30分）、長野原草津口～［バス］～草津温泉（約30分） ・東京～［JR新幹線］～軽井沢（1時間10分）、軽井沢～［バス］～草津温泉（約1時間20分）		
主な観光資源	＜特A級＞ 草津温泉の湯畑自然湧出泉源広場と温泉街、共同湯と時間湯 ＜その他の資源＞ 白根山、本白根山、光泉寺、西の河原露天風呂、片岡鶴太郎美術館など		
観光客数	2,807,859人（町全体、2013年）		
宿泊者数	1,810,471人（町全体、2013年）		
宿泊施設	110軒（町全体、2014年度、組合HP掲載）		
宿泊収容力	9,218人（町全体、2014年度、JTBF推計）		



資料：平成22年国勢調査（総務省）
（一社）草津温泉観光協会HP⇨http://www.kusatsu-onsen.ne.jp/
（公財）日本交通公社資源台帳
草津町HP⇨http://www.town.kusatsu.gunma.jp/
草津温泉旅館協同組合HP⇨http://www.yumomi.net/

（公財）日本交通公社作成

鳥羽温泉郷

鳥羽市温泉振興会 事務局長
一般社団法人鳥羽市観光協会 幹事
奥野 和宏

鳥羽、悠久の時の流れと共に

八百万の神々の中心にある天照大神をお祀りする伊勢神宮から、鳥羽は南に下った近い所に位置している。

鳥羽は、天照皇大神を奉戴し大御神を鎮祭し奉るべき宮地を求めた巡幸で、倭姫命と鳥羽の海女との出会いが縁となり、今でも神々の台所として伊勢神宮と結ばれている。鳥羽では、「海女の海」「魚介類豊富な豊饒の海」「稀人の海」「真珠誕生の海」「九鬼嘉隆の海城」「潮騒文学の海」と、住民も旅人も海に生かされてきた。

昨年、二十年に一度の「式年遷宮」を迎え、改めて伊勢神宮と鳥羽に脈々と生き続けている共通の「不易」は、日本人の精神、心といった「見えない価値」を大切にし、共有し合い、それが現代にもつながっていることであると認識した。

「見えない価値」を「見える価値」の深奥に見せる。「見えない価値」を、見えるモノの力を借りて見せることは、今までもこれからも、鳥羽の地域資源活用の基本である。そして、旅人も迎える側も、例えば美術、文芸、音楽、映画など、さまざまな作品を楽しみながら、モノの見方、考え方、楽しみ方を享受し、互いに幸福感を得ることが理想であろう。

写真1 人知を超えた見えない力に包まれる「伊勢神宮（内宮）」

写真2 縄文の時代より続く、海女の伝統的素潜り漁

「鳥羽らしさ」を魅力に

現在、鳥羽では、「第二次観光基本計画」を策定中であり、「鳥羽らしさ」の確立が計画の要諦となっている。

鳥羽における不易流行の「流行」とは、「鳥羽らしさ」を常に念頭に置きながら、奥に隠れている「見えない価値」を時代に呼応した形で〝見える化〟する（表現する）、価値創造することであると考えている。不変で見えない価値の見える化は、観光マーケティングとホスピタリティに基づく、〝新しい感性のまちづくり戦略〟ではないかと、私は感じている。

同計画では、

「ファンタジックな伊勢志摩」
「潮騒テーマパーク」
「女性が輝く女神の国」

を将来像（案）として掲げている。

「真珠婚のまち」
「潮騒六〇周年（小説、映画化）」
「祝祭ルート」
「祝い魚」

など、海をはじめとした豊かな自然や自然が育んだ優れた文化の力、それらの魅力素材を生かし、鳥羽らしさ、鳥羽の独自性を前面に出したツーリズムを市場に対して強く発信し誘客を図り、観光・交流による地域活性化の実現を目指す方向で議論が進展しつつある。

鳥羽は温泉地としては後発であるが、「禊湯（みそぎゆ）」としての価値を「流行」として付加し、その温泉力を高め、人生の節目やスタートに、海と食を生かした新しい贅沢（ぜいたく）の形を、「アニバーサリー宣言都市」として提供していきたいと考えている。

人口二万人の町が四百万人の旅人を受け入れるための、新たなチャレンジが始まった。市場の新たな欲求・要求を正しく捉え、関係者が一丸となって、「行ってみたい鳥羽」の実現に向けた青写真、基本計画の策定ができるのか、広く地域の人々の「意識改革、風土改革、機構・組織づくり」に見通しが立つのか、課題は多いが、関係者の一人としてできる限りの努力をしていきたい。

奥野和宏（おくの かずひろ）
三重県伊勢市生まれ。宿泊産業に長らく勤務し、鳥羽市の観光産業の発展に尽力。二〇〇一年からは「鳥羽市地球塾」の運営委員長として将来を担う人材の育成などにも取り組む。鳥羽シーサイドホテルの役員退任後、現在は、鳥羽市温泉振興会事務局長、（一社）鳥羽市観光協会幹事、鳥羽市観光アドバイザーなどを務める。二〇一二年には、「鳥羽市民功労者表彰」を受賞。

三重県鳥羽市「鳥羽温泉郷」

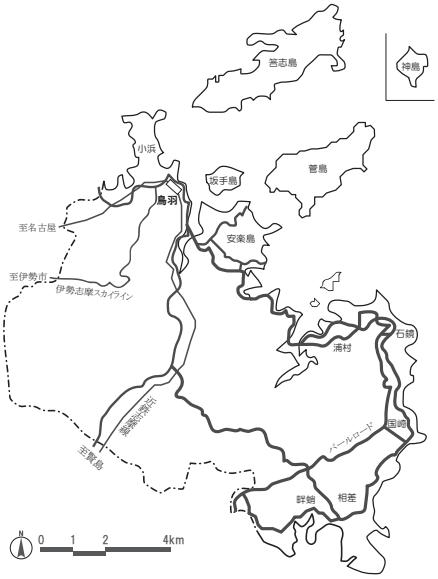
鳥羽温泉郷は、伊勢志摩国立公園内随一の宿泊拠点であり、神島や答志島といった離島や自然景観、散在する漁村集落や海水浴場、海の幸、真珠、水族館などを有し、三重県観光をリードしてきた。

2009年度には宿泊産業を中心とした観光産業の活性化を目的に『鳥羽市観光産業活性化戦略』を策定。品質重視の滞在型宿泊観光地を目指して、食をテーマとした体験プラン「ぐるとば」を開催するなど、着実に取り組みを進めつつある。現在は、鳥羽市観光の大切な魅力要素の一つである「漁業」との連携方策を検討中である。

文豪・三島由紀夫が最も美しいと評した神島灯台
（写真提供：鳥羽市観光課）

三重県鳥羽市「鳥羽温泉郷」の概要

面積	10,803ha（市全体、2014年）	産業別就業人口	（市全体、2010年） 第1次：1,325人、第2次：1,814人、第3次：7,100人
人口	21,435人（市全体、2010年）		
交通	＜名古屋から鉄道利用＞ ・JR名古屋～［JR快速］～鳥羽（約1時間50分） ・近鉄名古屋～［近鉄特急］～鳥羽（約1時間40分）		
主な観光資源	鳥羽水族館、ミキモト真珠島、海の博物館、石神さん（神明神社）、菅島灯台など		
観光客数	4,784,263人（市全体、2013年）		
宿泊者数	2,009,880人（市全体、2013年）		
宿泊施設	187軒（市全体、2013年）		
宿泊収容力	16,390人（市全体、2013年）		



資料：『平成25年度 鳥羽市統計要覧』平成26年4月、鳥羽市企画財政課
（一社）鳥羽市観光協会HP⇨http://www.toba.gr.jp/

（公財）日本交通公社作成

有馬温泉

有馬温泉旅館協同組合 理事
一般社団法人有馬温泉観光協会 理事
有馬ロイヤルホテル 若旦那
岩田 一紀

旅館、温泉地と私

私の勤務する「有馬ロイヤルホテル」は開業約八十年、とある旅館の番頭だった高祖父（松井峰一）が一念発起して始めた旅館だ。日本三古泉にも数えられる有馬温泉にあっては歴史の浅い宿だが、高祖父は消防団長を務めるなど、〝人望が厚く、面倒見の良い、しっかり者〟であったと聞く。最初は「金の湯」横の足湯あたりにあった当館が、今の「温泉寺」前に移ったのは五十年ほど前。今は父の岩田昌保が経営し、私はその補佐役を務めている。

写真1 行基により開基され、有馬温泉を見守り続けてきた「温泉寺」

私は旅館を営む家に生まれ育ったが、父の「公（旅館）、私（家）混同はしない」という考え、また面倒くさがりで人嫌いな自分自身の当時の性分もあり、子供時代に旅館で過ごした記憶はほとんどない。オーストラリア留学のために有馬温泉を離れ再び戻ってくるまでの間、旅館や温泉地との接点は皆無だった。

旅館、温泉地に生まれたことを初めて実感

留学後、飲食店での勤務を経て旅行関係の専門学校に入学。卒業の年に阪神・淡路大震災を経験、就職先の旅行会社が被災したこともあり、急遽（きゅう）、不動産業に勤務。自分の力が試される営業職を志願、ライバルに負けじと年間休みなく働き、心身、特に精神的なきつさを感じながらも、営業成績では常にトップを維持してきた。

二十八歳のとき、父からのたっての依頼で有馬温泉に戻り、初めて旅館と向かい合ったときの「あかん、なんて古くさい経営、なんて生ぬるい世界なんや」との衝撃、一方で感じた安らぎや心地よさは、今でも鮮明に覚えている。

戻って数年は旅館経営に専念していたため、旅館組合や観光協会の集まりに出席することは少なかったが、「自分の宿さえよければ」という気持ちがなかったわけではない。そうした中でも、街では「おぉ、ロイヤルの息子かぁ」と宿や商店の方々が気さくに声を掛けてくださり、困ったときには「俺もそうしてもらったんや」と相談に乗ってくださる方がいらっしゃった。世代を超えた助け合い、つながりに、有馬温泉という濃密なコミュニティに自分が生まれ育ち、生かされていることを実感。岩が川を流れて丸みを帯びるように、ゴツゴツした自分が有馬という川を流れる中で、自然と丸みを帯びているのが分かった。

有馬温泉に不易流行を考える

見渡せば、有馬温泉では、諸先輩や同期、後輩たちがまちづくりに熱心に取り組んでいた。「有馬温泉というネームバリューがあるからこそ、お客様は有馬温泉を選んでくださる。有馬温泉を魅力的な温泉地にしなければダメだ」と気づき、〝自分も頑張らないと〟と気持ちを引き締めた。

それからは、他業種に勤めた経験も生かして、有馬温泉の仲間たちとまちづくりに取り組んできた。「何

写真2 温泉まちづくり研究会にて、有馬の仲間たちと語り合う（右端筆者）

とかなる、まずはやってみよう」と発想する仲間も多く、前向きな議論と具体的な行動ができていると感じている。

二〇一三年（平成二十五年）三月には、そうした仲間たちで、平成二十五～三十九年度を計画期間とする「有馬温泉まちづくり基本計画『世界に誇れる温泉地を目指して』」を策定した。有馬らしさの継承は計画の要諦（ようてい）だが、私は、有馬らしさは「訪れる誰をも受け入れてきた温泉地が持つ懐の深さ、何とも言えない心地よさ、空気感、そして、そこに住む人々の優しさにある」と、自分自身の経験も踏まえて実感している。

これらを変容させることのないよう留意しつつ、有馬温泉の資源を活用して、いつの世にもお客様に選ばれる温泉地としての魅力づくりを行っていきたい。

岩田一紀（いわた かずき）
一九七二年生まれ。神戸市有馬温泉出身。有馬中学校卒業後、オーストラリアに三年間留学、帰国後、飲食業、不動産業などでの勤務を経て、現職。（一社）有馬温泉観光協会理事、湯泉神社総代の他、兵庫県旅館ホテル生活衛生同業組合青年部長、兵庫県中小企業団体中央会幹事などを務める。

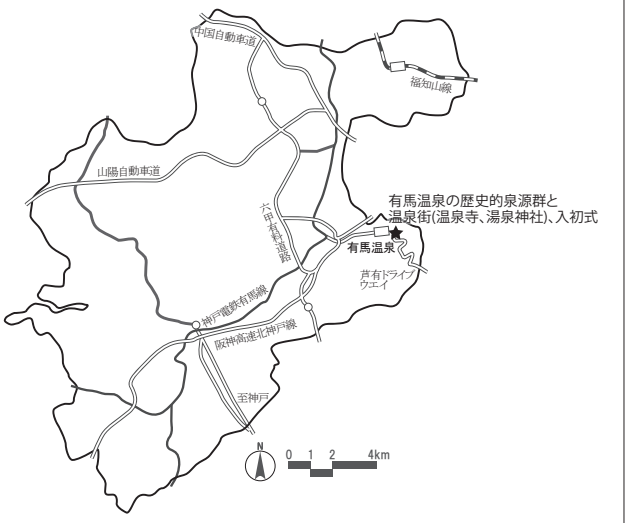
兵庫県神戸市北区「有馬温泉」

有馬温泉は、六甲山の北部に位置し、1300年の歴史と伝統を誇る日本最古の温泉地の一つ。時の為政者や文人墨客など、多くの歴史上の人物に愛されてきた。有馬温泉では、1995年の阪神・淡路大震災を契機に、温泉街の魅力を高めて誘客を図ろうと、古い商店などを生かした街並み環境の整備や、話題性のあるイベントの開催など、ハード・ソフトの両面で数多くの事業を次々と展開してきた。2013年度からは、若手・中堅が中心となり策定した『有馬温泉まちづくり基本計画』に基づき、「世界に誇れる温泉地」を目指した取り組みが行われている。

天神社の境内に湧く金泉「天神泉源」

兵庫県神戸市北区「有馬温泉」の概要

面積	24,173ha（区全体、2014年）	産業別就業人口	（区全体、2010年） 第1次：1,288人、第2次：16,612人、第3次：74,313人
人口	226,836人（区全体、2010年）		
交通	＜新大阪駅から鉄道利用＞ ・新大阪～［JR］～三ノ宮～ ［市営地下鉄］～谷上～ ［神戸電鉄］～有馬口～ 有馬温泉（約1時間10分） ＜新神戸駅から鉄道利用＞ ・新神戸～［北神急行］～谷上～ ［神戸電鉄］～有馬口～ 有馬温泉（約30分）		
主な観光資源	＜A級＞ 有馬温泉の歴史的泉源群と温泉街（温泉寺、湯泉神社）、入初式 ＜その他の資源＞ 善福寺（曹洞宗）、太閤の湯、有馬玩具博物館など		
観光客数	1,660,000人（有馬地区、2013年度）		
宿泊者数	（未詳）		
宿泊施設	29軒（有馬温泉、2014年度、協会HP掲載）		
宿泊収容力	4,828人（有馬温泉、2014年度、JTBF推計）		



資料：平成22年国勢調査（総務省）
有馬温泉観光協会HP⇨http://www.arima-onsen.com/
（公財）日本交通公社資源台帳
神戸市HP⇨http://www.city.kobe.lg.jp/

（公財）日本交通公社作成

道後温泉

道後温泉旅館協同組合 副理事長
道後温泉誇れるまちづくり推進協議会 会長
株式会社宝荘ホテル 代表取締役社長
宮﨑 光彦

最古にして最先端

今年、改築百二十年の大還暦を迎えた道後温泉本館および温泉街は、記念事業「道後オンセナート二〇一四」開催により、気鋭のメディアアーティストによってアート作品へと大きく変貌している。

道後の九の旅館・ホテルでは館内の各一室が草間彌生をはじめとする国内外の著名芸術家たちによる、泊まれるアート作品群「Hotel Horizontal」が誕生し、体験型アートや地元若手クリエーターの運営するイベントも道後に点在するなど、昼も夜もまちを巡りながら町全体の魅力を最大限に味わえる、〝最古にして最先端〟の新たな試みが佳境を迎え、まさに温泉地における「不易流行」を体現中である。

写真1 日本三古湯の一つ・道後温泉のシンボル「道後温泉本館」

道後温泉は、三千年の歴史を誇る日本最古の温泉地として全国に知られているが、実は百二十年前の一八九四年（明治二十七年）、道後湯之町の初代町長伊佐庭如矢（いさにわゆきや）を先頭に町全体で、幾多の困難を克服して改築した道後温泉本館を中心に観光産業の基盤整備が図られ、現在の繁栄の基礎が作られたといっても過言ではない。現在の道後温泉は、小説『坂の上の雲』に描かれている明治の時代の松山人の志、百年先の今日を見越した先見の明によるものなのである。

私たちは、先人が残した偉業・遺産を食い潰しているだけではないかとの反省のもと、地域の根本的課題を、①国の重要文化財である道後温泉本館に過度に依存、②歴史文化を標榜（ひょうぼう）しながらも希薄な歴史の視認性、③地域間競争の中での相対的な温泉力・地域力の低下と捉え、一九九二年（平成四年）に「道後温泉誇れるまちづくり推進協議会（現会員数約二百十人）」を立ち上げた。

以来、グランドデザインを策定し、①「坊っちゃん列車」の復元運行の実現、②足湯・開運巡りの構築、③道後温泉本館周辺の道路の付け替えによる画期的な景観整備や賑（にぎ）わい空間の創出、④ファサード整備、などの取り組みを展開してきた。

進化し続ける道後温泉

道後地域には、本館改修工事および旅館ホテルの耐震化を目前に、大きな危機感があるが、「本館に頼らない温泉地」にあえて変えていく一大転機と位置づけ、各宿泊施設や商店街の更なる商品価値向上に加え、地域全体で心地よく過ごせる時間と空間づくりのために、地域資源の再構築に取り組み始めた。

挑戦の一つに、道後の佇（たたず）まいに深い歴史性を表現するための象徴と景観保全および湯巡り・まち歩きの核として、古代から今日にわたり各時代で愛されてきた「歴史的温泉施設群」の整備がある。具現化中の「（仮称）道後飛鳥の湯・女帝の湯」では、「名湯と歴史浪漫に浸る」をテーマに、道後そのものが体感でき、バリアフリーや国際化などにも対応している。単なる景観の修景、施設の復元や再現を超えた魅力的で活力ある都市型温泉郷の実現を目指して、本物を生かした新しい価値の創造が必要だと考えている。

しかし、さまざまな事業を行う上

写真2 地元からの熱い声を受けて復活した、新生「坊っちゃん列車」

で、最も守り伝え、変えてはいけないものは、「温泉の恵みと固有の歴史文化の豊かさを生かし、掛け替えのない財産として次代に継承発展させていく」という覚悟であり、何よりも地域に対する限りない愛情、不屈の行動力と地域住民の結束力、そして誇りだと思っている。

道後温泉の伝統は、革新の積み重ねである。「歴史漂う景観まちづくり宣言『道後百年の〝景〟』」を着実に実行し、「日本最古の温泉地」から「日本の温泉文化の歴史を発現した温泉地」へと脱皮・発展していくために、最も変えていくべきは、「湯量や資金が無いから」という諦めの気持ちであり、その中で私たち自身のエネルギーを〝発想とやる気〟に昇華させていくことかもしれない。

宮崎光彦（みやざき みつひこ）
愛媛県生まれ。岡山大学法文学部法学科卒業。国税庁、愛媛県庁職員を経て、宝荘ホテル入社、現在、代表取締役社長、ホテル椿館代表取締役会長を兼務。道後温泉誇れるまちづくり推進協議会会長、道後温泉旅館協同組合副理事長、愛媛県旅館ホテル生活衛生同業組合専務理事、（公財）松山観光コンベンション協会理事・企画委員長、JTB協定旅館ホテル連盟愛媛支部支部長、愛媛県行政改革・地方分権推進委員会委員などを務める。

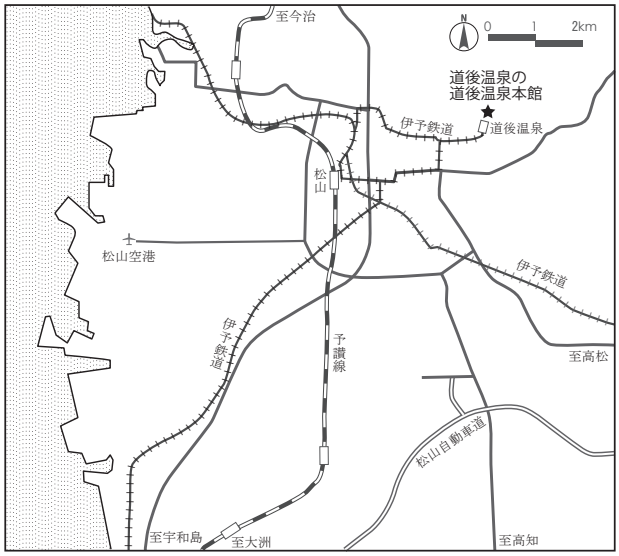
愛媛県松山市「道後温泉」

道後温泉は、日本書紀にも登場する我が国最古の温泉の一つ。1894年に建築された道後温泉本館は、数度の増改築を繰り返しながらも建築当時の姿をとどめ、現在も多くの方に利用されている。道後温泉では、『歴史漂う景観まちづくり宣言・道後百年の“景”』に基づき、民間団体が主導して、美しく魅力的でかつ都市型温泉郷空間の実現を目指した取り組みが進展中である。2014年は、道後温泉本館改築120周年を記念して、温泉ばかりではなく街に関心を持ってもらいたいと、温泉と現代アートが融合した「道後オンセナート」を開催中。

道後温泉駅前でお客様を迎える「坊っちゃんカラクリ時計」

愛媛県松山市「道後温泉」の概要

面積	629ha（道後支所区、2014年）	産業別就業人口	（道後支所区、2010年） 第1次：176人、第2次：1,051人、第3次：8,946人
人口	25,669人（道後支所区、2010年）		
交通	＜松山空港からバス利用＞ ・松山空港～［バス］～道後温泉（約40分） ＜岡山駅から鉄道・路面電車利用＞ ・岡山～［JR特急］～松山（約2時間40分）、松山～［路面電車］～道後温泉（約25分）		
主な観光資源	＜A級＞ 道後温泉の道後温泉本館 ＜その他の資源＞ 道後温泉駅、放生園、松山市立子規記念博物館、湯神社、伊佐爾波神社、石手寺、円満寺、道後公園・湯築城趾など		
観光客数	1,061,194人（道後温泉本館・椿湯の合計入浴客数、2012年）		
宿泊者数	817,000人（道後温泉、2013年）		
宿泊施設	32軒（道後温泉、2013年）		
宿泊収容力	6,280人（道後温泉、2013年）		



資料：平成22年国勢調査（総務省）
道後温泉旅館協同組合HP⇨http://www.dogo.or.jp/
（公財）日本交通公社資源台帳
愛媛県『平成24年観光客数とその消費額』平成25年6月
道後温泉誇れるまちづくり推進協議会

（公財）日本交通公社作成

由布院温泉

一般社団法人由布院温泉観光協会 事務局長
生野 敬嗣

持続可能な地域であるために

由布院のまちづくりの原点は、本多静六博士が大正時代の講演時におっしゃった「ドイツのような生活型の保養温泉地を目指すべきである」という提案だ。

昭和四十年代には、先輩諸氏がドイツをはじめとするヨーロッパの視察から学び、「観光のまちをつくるのではなく、温泉、スポーツ、芸術文化、自然景観といった生活環境を整え、住民の暮らしをより充実し落ち着いたものにし、由布院独自の保養温泉地を形成しよう」と動き始めた。それから約五十年、由布院温泉観光協会では現在もその流れを引き継ぎ、滞在型の保養温泉地を目指している。

写真1 早朝、霧が立ち上る幻想的な光景を見せる「金鱗湖」
（写真提供：（一社）由布院温泉観光協会）

そんなまちづくりの理念を追い求める由布院だが、実践するまちの人々の想いがなければ絵に描いた餅で終わっていたかもしれない。どんなに素晴らしい理念や計画を持っていたとしても、やはりそれを実践する人の想いがしっかりしていなければならないということを、私は十年の月日を由布院のみんなと身近に過ごしてきた中でひしひしと感じてきた。

人の想いとは、当たり前のことかもしれないが、地域に対する想いの力強さだと思っている。地域を愛するって当たり前のことじゃないの？と思われるかもしれないが、由布院のみんなは何かが違うのだ。日本の高度経済成長期に自然を大切にしようと訴える力、日出生台（ひじゅうだい）演習場での米軍演習移転反対運動を起こす力、平成の市町村合併ではまちを二分してまで闘う力、などなど。観光だけでなく、いろんなコトをやってきた力強い想い、「由布院スピリッツ」が他とは違うのだと感じる。

この「由布院スピリッツ」は、由布院固有の風土、風景、風情がつくる空間の中から生まれた生活文化によって育まれてきた独特なものと思われる。由布院という地域がこれからも持続していくためには、このスピリッツを守り受け継いでいかなければならない。

しかし、一方で時代は日々動きが変化している。

高齢者が増加し、独居世帯が増加するなかで、若者が減少している。観光分野においても右肩上がりで推移してきた由布院を訪れるお客様の減少、外国人旅行者数の増加など、これまでと異なる環境の変化が起きている。

持続可能な地域であるためには、変化する現実をきちんと受け止め、先輩諸氏から受け継いだ「由布院スピリッツ」を胸に、きちんと向き合っていくことが必要になってきたのではと感じている。

「みんな」で創造する由布院の未来

由布院温泉観光協会では、本年度事業計画において、人をお迎えするまちとしての基本を整えるべく、新たな「ツーリスト・インフォメーション・センター」の設置に向けて活動していくことを掲げた。インターネット全盛の時代だからこそ直接的な人と人とのコミュニケーションを大切にし、由布院本来の魅力をきちんと表現してお客様にお伝えしていくという、おもてなしの原点にまずは戻りたい。

写真2 自主・自立の精神が生きる、夜なべ談義
（写真提供：（一社）由布院温泉観光協会）

それに合わせて、今年の四月から官民協働による新たな観光支援組織の設立に向けた準備室が由布市商工観光課内に立ち上がり、当協会もその支援を行っている。新組織は、「住んでよし、訪れてよし」の「滞在型・循環型保養温泉地」を目指すとともに、持続可能なまちづくりに貢献することを目的に動き始めている。

新たな動きの中で、改めて由布院の将来像をみんなで議論し、検討することも必要だと考えている。議論の結果、以前と変わりなければそれはそれでよし、環境の変化に応じて軌道修正を図るならそれもよし。

由布院のみんなと共に、何を守り、何を変えていくのかを、時にお酒を飲みつつ夜なべ談義することが、これまでも、これからも由布院にとって一番大切なコトのはずだから。

生野敬嗣（しょうの　けいじ）
大分県由布市（旧庄内町）生まれ。（一社）由布院温泉観光協会事務局長。観光とは縁遠い不動産業、通信事業で管理部門に勤務。二〇〇四年、事務局員全国公募に応募したのをきっかけに出会った由布院の人たちに魅せられ、由布院観光総合事務所に転職。由布院温泉観光協会の世代交代時に若手理事の担当者として苦楽を共に重ねる。二〇一〇年より現職。二〇一四年四月より由布市商工観光課観光新組織準備室次長を兼務。

大分県由布市「由布院温泉」

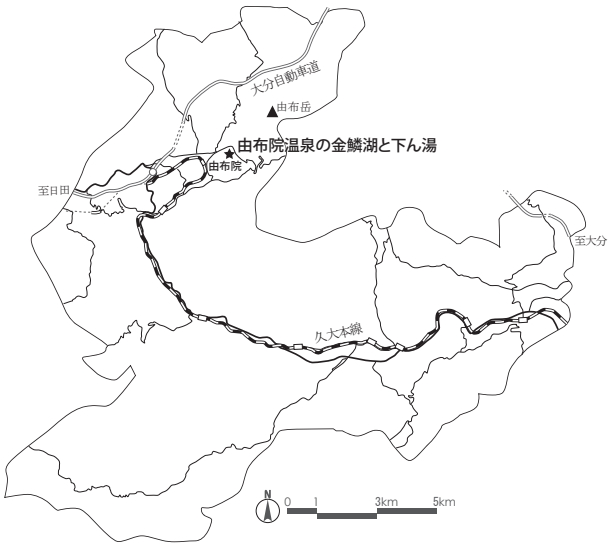
由布院温泉は、由布岳に抱かれた由布院盆地内に位置し、全国第2位の源泉数と全国第3位の温泉湧出量を誇る温泉地である。由布院温泉は、長きにわたり、「最も住みよい町こそ優れた観光地である」との認識に立ち、出会いや交流の場としての観光まちづくりを、民間主導で実践してきた。由布院のまちづくりに共感して訪れるファンも多い。

現在は、行政と効果的に連携し、より質の高い環境の創出に向けた動きが活発になっている。

由布岳を背景にのどかな田園を行く「観光辻馬車」
（写真提供：由布市商工観光課）

大分県由布市「由布院温泉」の概要

総面積	31,916ha（市全体、2014年）	産業別就業人口	（市全体、2010年） 第1次：1,513人、第2次：2,617人、第3次：12,192人
人口	34,702人（市全体、2010年）		
交通	＜福岡空港から高速バス利用＞ ・福岡空港～［高速バス］～由布院温泉（約1時間45分） ＜博多から鉄道利用＞ ・博多～［JR特急］～由布院（約2時間） ＜大分空港からバス利用＞ ・大分空港～［直行バス］～由布院温泉（約55分）		
主な観光資源	＜A級＞ 由布院温泉の金鱗湖と下ん湯 ＜その他の資源＞ 湯の坪街道、九州湯布院民芸村、フローラハウス、アトリエときデザイン研究所、西蓮寺など		
観光客数	3,888,454人（市全体、2012年）		
宿泊者数	741,328人（市全体、2012年）		
宿泊施設	204軒（市全体、2012年）		
宿泊収容力	8,076人（市全体、2012年）		



資料：平成22年国勢調査（総務省）
由布院温泉観光協会HP⇨http://www.yufuin.gr.jp/
（公財）日本交通公社資源台帳
平成24年観光動態調査（由布市）

（公財）日本交通公社作成

黒川温泉

黒川温泉観光旅館協同組合 専務理事
NPO法人南小国まちづくり研究会 みなりんく 代表理事
有限会社御客屋旅館 代表取締役
北里 有紀

「黒川温泉一旅館」

この言葉は、先代たちの取り組みの中で生み出された黒川温泉の地域理念である。若手経営者にとっては、先代たちが残してくれた遺産であり、誇りをもって引き継いでいかなければならない、情熱と覚悟を揺さぶられる言葉でもある。

黒川全体を一つの宿に見立て、繋ぐ道は廊下、一つ一つの旅館は部屋。地域全体の繁栄を目指してこそ、個と全体の存続も成し得る、という考えだと、私自身は理解をしている。

具体的にお伝えすると、「個は競う。しかし、全体は一緒にやる」ということの実践ではないだろうか。個々の旅館のさまざまなしつらえ、館内・部屋・風呂などの設備、料理の素材や献立、人材育成やおもてなしの質の向上など、これらは一旅館ごとに独自の提案を磨き、互いに刺激し合いながら、競っていかなければならないことだ。

一方で、黒川温泉という地域全体のことは、共に対話し、共に行動する。一旅館の経営者としての視点だけではなく、一住民のスタンスに立ち戻って地域の将来像を描き、旅館という家業を通じて何ができるのかを考え、行動し続けることではないかと思っている。

今から二十年ほど前に生み出された言葉だが、引き継ぐ私たち世代の課題として、観光事業者の中だけの地域理念ではなく、黒川に暮らす、働く人々まで巻き込んだ中身づくりが必要だと感じている。

写真1 黒川温泉一旅館の精神を象徴する取り組み「入湯手形」
（写真提供：黒川温泉観光旅館協同組合）

「この地域に暮らしてよかった」
「ここで働いていて、楽しい」

温泉地として今後も生き残るということは、地域外の方々を受け入れ続けることが宿命でもある。暮らす私たちが、まず、地域の魅力と誇りを感じ豊かに幸せに生き、そこに地域外の皆様をお迎えすることこそが、大きな強みになると考える。

先進国の中で先んじて人口減少の波にのまれていく日本。地方は課題の先進地。都市部よりも早く、縮む社会の問題に直面する。

これまでの黒川温泉の地域づくりの原動力は、宿主を中心とした地域内の人間の結束力だった。しかし、この先、縮んでいく社会が前提ならば、地域内の人々だけの繋がりや努力だけでは、地域の存続は難しいと感じている。

「黒川温泉一旅館」の理念の下、住民である私たちが、まず黒川温泉の将来のありたい姿をしっかりと描く。そして、その想いを世に発信し、地域外の共感してくださる方々、共に行動してくださる方々を巻き込み、地域の存続の方法を模索していくことが、私たちの世代の大きな挑戦であり使命だと考えている。

面的活動の先に描く未来

先の考えに至るきっかけとして、昨年、ある出来事があった。黒川温泉も所在する南小国町のなかで、縁あって地域づくりの仲間と共に、「NPO法人南小国まちづくり研究会みなりんく」という組織を設立した。特徴として、農業・製材所・飲食店・雑貨店・小売店・福祉施設職員・行政職員・旅館業などメンバーの職業が多様なこと。設立までの準備期間、それぞれの職業のフィルターを通した視点も踏まえながらも、基本は一住民の立場で地域の将来を語り合った。導き出した企業理念は、「この土地に根付くさまざまなモノゴトを引き継ぎ、未来へとつなげていく。

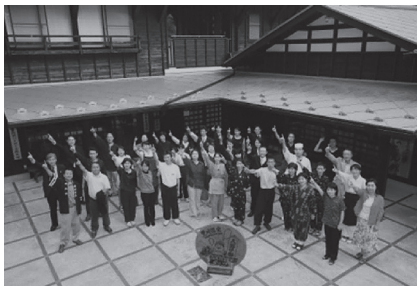


写真2 黒川温泉一旅館、想いを語り行動する仲間たち
（写真提供：黒川温泉観光旅館協同組合）

そして、人生を豊かに楽しく生きる人々を増やし続ける。」

個人的な見解だが、温泉地の発展や存続については、どれだけ地域内で面化する取り組みを進められるかが鍵になると思っている。今までは関係ないからと、点であった関係も、地域の未来を共に創るという観点で縁を結べば、線になり、面になる。

まさに、これからの地域観光の持続的発展は、観光事業者にとどまらない、さまざまな人々が関わる地域ビジョンを描き出せるかが問われる気がしてならない。

「小さな集落の、大きな未来」

志を同じくする仲間の想いと歩みに共感し、共に歩んでくださる方々との出会いに感謝し、これからも日々、黒川温泉の地域づくりを楽しみながら、生きていきたいと思っている。

北里有紀（きたざと ゆうき）

熊本県南小国町黒川温泉生まれ。九州女学院を卒業後、家業の旅館「御客屋」に勤務。黒川温泉最古の老舗宿で、現在、代表取締役、七代目御客番を務める。ストレートで真っ向勝負、黒川温泉をこよなく愛する多くの仲間とともに、まちづくりに奔走、取り組む。現在、黒川温泉観光旅館協同組合専務理事、NPO法人南小国まちづくり研究会みなりんく代表理事などを務める。

熊本県南小国町「黒川温泉」

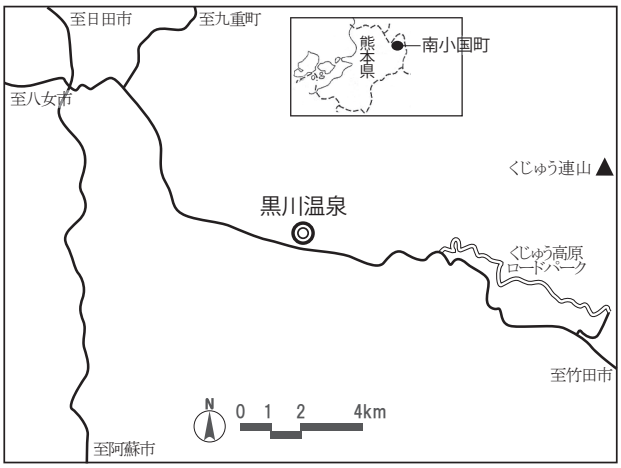
黒川温泉は、阿蘇北側の閑静な山あいに位置し、心安らぐ自然と日本のふるさとを感じさせる街並み、各宿が趣向を凝らした露天風呂が特徴的な温泉地である。高い人気を誇り、『ミシュラン・グリーンガイド・ジャポン』にも二つ星で掲載されている。

「黒川温泉一旅館」を合言葉に、一致団結して温泉地の景観づくりと環境保護に取り組んできた。「入湯手形」での露天風呂巡りは、多くの温泉地の手本となった取り組みの一つである。現在、30～40代（黒川温泉第3世代）が中心となり、まちづくりに取り組んでいる。

景観にこだわり、皆で創り上げた魅力的な温泉街
（写真提供：黒川温泉観光旅館協同組合）

熊本県南小国町「黒川温泉」の概要

面積	11,590ha（町全体、2014年）	産業別就業人口	（町全体、2010年） 第1次：580人、第2次：368人、第3次：1,575人
人口	4,429人（町全体、2010年）		
交通	＜福岡（天神）から高速バス利用＞ ・天神～［バス］～黒川温泉（約2時間40分） ＜福岡空港から高速バス利用＞ ・福岡空港～［高速バス］～黒川温泉（約2時間20分） ＜熊本空港からバス利用＞ ・熊本空港～［バス］～黒川温泉（約2時間30分）		
主な観光資源	夫婦滝、小松地獄、池山水源、首なし地蔵、地蔵湯、田の神様、満願寺、総合物産館きよらカアサなど		
観光客数	1,190,000人（町全体〔見込み〕、2013年）		
宿泊者数	450,000人（町全体〔見込み〕、2013年）		
宿泊施設	28軒（黒川温泉、2014年度、組合HP掲載）		
宿泊収容力	1,984人（黒川温泉、2014年度、JTBF推計）		



資料：平成22年国勢調査（総務省）
黒川温泉観光旅館協同組合HP⇨http://www.kurokawaonsen.or.jp/
南小国町まちづくり課

（公財）日本交通公社作成